2024 ズバリ！的中 現代文

同志社大学

模試【文章Ⅰ】労働を三種に分けるアレントの主張の解説部分が一致。
模試【文章Ⅱ】出典こそ異なるが同一筆者によるアレントの主張の解説のため論旨が一致。

入試問題

2月6日実施　学部個別日程
一　4～6頁

一　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ところでアレントはこの労働と仕事のほかに、活動という概念を提起して、人間の行動の全体をこれらの三つの概念に分けて考察した。

アレントによると「労働」という営みは人間が自分の生命を維持するために必要な苦しい営みであり、これはきわめて個人的なものである。この労働は個人の生活を支えたあとには何も残さない。家庭において食事の用意をし、部屋を片づけ、掃除する営みなどは、日々の生活において重要なものであるが、食べてしまえばあとには何も残らず、部屋を片づけても、その成果はたんに暮らしやすくなるというだけのことである。この種の労働は、人々の生活を維持するためには不可欠であるが、あとには何も残さず、何も生産しないのであり、ときに空しく感じられるものである。

これにたいして「仕事」という営みは人々が自分の能力を発揮して社会のために何かを残そうとするものであり、創造的な性格をそなえている。この行動によって世界にさまざまな作品と道具が残される。この営みは個人的な才能を発揮するという意味では個人的なものであるが、世界に産物を残すという意味では半ば公的な性格を帯びている。

最後の「活動」という営みは人々が公的な場において自分の思想と行動の独自性を発揮しようとするものである。この営みは、個人の生活の維持ではなく、公的な場において共同体の活動に参画するものであり、公共的な性格を帯びるものである。この思想と行動という活動のあとには、目に見える「作品」のようなものは残らないことが多い。アレントはこの活動という営みを、労働や仕事とは明確に異なる特別な次元の行為として捉えたのだった。

これは古代ギリシアのポリスのありかたを反映したものだった。ポリスにおいて個人は家庭において自分と家族の生活を維持するために「労働」する。この労働という営みは、家において行われるものであり、公的な世界からは隔絶されたものとされていた。この「自然の共同体」としての「家族の領域」は「個体の維持と種の生命の生存のため」に必要とされた領域であり、必要性と必然性に支配されていた。

次の「仕事」という営みは、共同体の人々のために行われるものであり、「公衆のために家の境界の外で行われるすべての行動を意味した」。これは主として職人による手仕事であり、公的な意味をそなえているものの、共同体での公的な活動とはまったく別の種類のものであった。こうした営みに従事している人々は、公共の場で共同体のための発言をすることが許されないことが多かった。

古代ギリシアでは身分的にも、仕事に従事する人々は公共の場から排除されることが多かった。この営みは家のなかでの労働

河合塾

第3回　全統共通テスト模試
第1問　4～8頁　文章Ⅰ・Ⅱ

第1問　次の**【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】**は、いずれもドイツの哲学者ハンナ・アレント（一九〇六―一九七五）の思想について考察した文章である。これらを読んで、後の問い（**問1～6**）に答えよ。（配点　50）

【文章Ⅰ】

アレントの『人間の条件』（一九五八年）は、彼女の政治理論が最も体系的に示された著書である。アレントの人間論のなかで最も重要なのは、人間は複数の人びとのなかで生き、互いに異なっているが相互に理解可能だという複数性の概念である。政治とは、複数性の領域における人間の公的な営みである。全体主義権力は、一人の意志によって動かされるという点で、複数性とは反対の性格を具えていたが、本来あるべき政治は、政治的共同体を一者化せず、あらゆる多様性をもつ個人個人の相互行為として展開していくのである。

「人間の条件」のなかでアレントは、政治を活動として理解しているのだが、彼女の「活動」概念は、ほかの行為形態である「労働」と「仕事」との対比のなかで明らかにされる。つまり、彼女は、そのなかで「われわれが行なっていること」を、「労働」・「仕事」・「活動」に三区分している。それによれば、労働は、生命を維持していくための営みであり、消費するものの生産であり、あとに残らないという意味で虚しさが付きまとっている。また、「労苦」ということばに示されるように、苦しい、単調な作業である。仕事は、耐久性のあるものの制作であり、孤独な作業だが、完成したときに充実した喜びを味わうことができる。活動は、常にことばを伴い、他者と協力して行なう営みであり、その過程において行為者は自己のユニークさを示し、卓越への欲求を充足させることができる。

A アレントが活動と仕事を労働より高く位置づけているのは、世界性の有無による。「世界」という概念は、彼女の思想の鍵概念であるが、それは、彼女が、有限な人間が自分の生命を超えるものを地上に残したり、他者と喜びを共有したりすることができることに価値を置くからである。この世界で限られた生を送る人間は、不死なるものを希求し、多くの場合、子どもを産み育てることによって充足するのだが、仕事によってフ(ア)キュウの作品をつくったり、活動によって人びとの記憶に

(イ)残り、記録され、物語られたりすることによって世界をつくることもできるのである。

活動の場合、仕事の助けを借りて、記録や歴史や物語として残され、人間の生命を超えることができる。人びとともに構成する人間世界があるから出来事が起こるのであり、人間の生命を超えるものの象徴として世界が理解されているからでもある。つまり、労働は、消費を目的とするものを生産する営みであり、人間が生命維持のためにせざるをえない営みであるのに対し、仕事は「物の世界」をつくり、作者の生命を超える作品を世界に残すことも可能である。活動は、人びととの協力なくしてはなしえず、人間は活動しているあいだ、「人間関係としての網の目」としての公的関係を構成している。この公的関係は人間世界であり、活動は、結果としてよりよき世界を残していくことにもつながっていく。

アレントは、活動がつくり出す世界のことを「人間関係の網の目」と呼び、重視している。というのも、そのような関係のなかで生きることによってのみ、人間は自分のユニークさを表すことができるからである。アレントは人が直接見たり聞いたりすることのできる、触知しうる（感覚的に捉えられる）現実のことを「リアリティの世界」と呼んでいるが、このようなリアリティの世界を実感できるのが、活動の喜びである。アレントは公的領域の価値を強調したが、人間の生活には隠された側面があるから生活の深みを保つことができるのだと考えていた。つまり、完全に公的な場所で送られる生活は(ウ)センパクであり、隠された私的領域が存在するおかげで、われわれは、世界の問題に多様なかたちで関わることができるのである。公的世界が重要なのは、出来事を語り合いの対象とすることによって人間的であることを学ぶことができるからであり、それとともに、一人ひとりの人間がかけがえのない個人だからである。

活動には、他者と出会う場が必要であり、あらゆる多様性に開かれた空間が必要である。それこそが公的空間であり、人びとが見知らぬ他者の前に現れ、ことばや行為によって自己を開示する「現れの空間」である。

（寺島俊穂『ハンナ・アレント再論』による）

のように生活と自然の必然性に服従するものではないとしても、公的な場での自由な営みではなかった。それというのも、仕事に従事している人々は、公的な場で発言するために必要な自由をそなえていなかったからである。アテナイでは仕事に従事している人々は自由人としての権利を認められないことが多かったが、それは何かを制作するという営みに従事しているために、公的な活動をするのに必要な閑暇がもてなかったからである。

この仕事という営みがアテナイの自由人から軽蔑され、嫌われていたことは、『ソクラテスの思い出』においてソクラテス（前四七〇／四六九～前三九九）の友人のアリスタルコスが語った言葉からも明らかである。アリスタルコスはアテナイで起きた内乱のために親族の女性が彼の家に集まってきたので、家を維持するために経済的に苦しくなって困っていた。ソクラテスは、衣服を縫わせるとか、蕎麦を作らせるなどの方法で大きな富を得ている人々がいることを指摘して、それにならって彼女たちにも仕事をさせてはどうかと提案する。するとアリスタルコスはそのような方法で富を築いた人々は、「異国の人間を奴隷に買ってきて、なんなりと適当な仕事をむりやりやらせるからであって、私の家にいるのは自由の身分の、しかも身内の者たちだ」と反論する。こうした仕事は自由な身分の人間たちがやるべきことではないと信じ込んでいるのである。

D アリストテレス（前三八四～前三二二）もまた、職人たちには自由人にふさわしい徳が欠如していて、奴隷と同じ程度の徳しかもっていないと考えていた。職人について「職人が奴隷状態に置かれる程度とまさに同一程度の徳がふさわしいことになる。というのも俗業的な職人の有するのは一種の奴隷状態だから」と語っていたのである。

最後に「活動」とはポリスの公的なことがらを担う営みであり、これは公的な自由の領域で行われるものであって、ポリスの自由民だけが自由を享受しながら、こうした公的な活動に従事した。自由であるということは、支配されないということであるが、それはたんに生活と自然の必然性に支配されないだけでなく、他者を支配する必要性にも支配されないということだった。「それは支配もされなければ支配もしないということだった」のである。

だから活動は労働とも仕事とも異なる自由な活動であり、無償で行われるべきものだった。これは労働とはもっとも対照的な営みであり、生計の維持を目指したものでも、何かの作品を世界に残すことでもなかった。しかし現代においてはこの自由な公

【文章Ⅱ】

アレントは古代のギリシアのポリスという政治的な空間を実例として示しながら、人間の活動性には三種類の活動と、それが展開される領域があることを示した。しかしこの領域は、古代ギリシアだけに存在するものではない。

わたしたちが言論と活動によって人々の目の前に登場するとき、つねに「現われの空間」が生まれるのであり、公的な領域が作りだされているのである。たとえば、個人的な問題ではなく、人々に共通する問題を話し合うために集会が開かれたとしよう。町の自治会でも、学校のＰＴＡでも、個人の私的な利益についてではなく、すべての当事者にかかわる問題を検討する集まりであれば、それは公的な集会だと考えることができるだろう。

B その公的な集会において、あなたが挙手して発言したとしよう。そのときにあなたは議論されている問題にたいして自分の意見を述べることになるだろう。ここで何が起きているのだろうか。まずあなたは公的な問題について関心をもっていて発言する意思があることをその挙手で示したということである。

次にあなたはその自分の発言によって、その集会における議論に影響を与えようとしていることになる。もちろん自分の見栄のために発言する人もいるだろうが、それでもその意見は議論に影響するのである。こうした発言は、他者を言葉によって説得することを目指している。

さらにあなたはその発言によって、自分がどのような存在であるかを暴露している。発言することによって、あなたはこの集会の場で他者の注目を集める。いわば舞台の上に登場して、スポットライトが当たっているのである。他者はあなたに注目し、あなたの発言に傾聴すると同時に、あなたがどのような人柄であるかを暗黙のうちに計るだろう。この発言によって、「行為者は、自分を活動する者として認め、自分が何をするのか何をしたか、何をするつもりであるかということを知らせる」のである。

そしてあなたはこのように発言することによって、他者の批判をうける用意があることを示したことになる。発言するという行為は、他者を説得しようとする試みであると同時に、その人がどのような人であるかを暴露する。その人は発言すること

的な活動の営みもまた重要な職業となっているのであり、生活の資を稼ぐ営みとなっている。そのことはマックス・ウェーバー（一八六四～一九二〇）が『職業としての政治』で強調したことでもある。現代の政治は「政治を職業とする真の人間たち」が担う活動なのである。

このように現代ではほんらいの意味では活動であるものが一つの職業となっているが、それはもはやわたしたちが古代ギリシアのポリスに生きていないという時代的な変動の結果ではあるが、アレントの分類ではうまく整理できない部分があるためでもあるのはたしかである。活動という公的な営みは、共同体のうちで自由な人間がその能力を発揮して人々が高い評価を獲得することを求めるものであるが、労働や仕事を含めて、人間のすべての営みにはこのような社会的な評価を得ようとする要求が含まれているものである。わたしたちは労働することによって生活の資を稼ぎながらも、会社や労働の現場において人々との絆を構築し、他者から評価を獲得することができる。その意味では現代では労働はもはや閉ざされた家庭の内部での私的な活動ではなく、社会的で公的な重要な意味がそなわっているのである。

（中山元『労働の思想史』）

で、「暴露の危険をみずから進んでおかしている」のである。発言するということは、そのようにその人の人格とアイデンティティを作りだすと同時に、それを他者の面前にさらけだす行為である。発言はみずから危険をおかすことであり、その危険を引き受けようとする勇気を示すことである。

またこのように発言することは、他者から反論されることを引きうけることである。他者を説得するという行為は、ほぼ確実に他者からの反論をうけ、批判されるということを想定している。それはみずからへの攻撃を招く危険性を引きうけることである。そして他者を説得するためには、他者からの反論に対処し、その反論に反論をするか、新たな議論の地平を示すことによって、その反論をうけいれながらも、それを乗り越える姿勢を示す必要がある。発言するということは、みずからを露呈する勇気を示すことで、他者との間に関係を構築することを引きうけるということである。

そのためには、集会に参加している他の人々が、自分と平等で自由な人々であるということ、そして意見は多様なものであるということを前提としなければならない。こうした発言は、「人間の多数性」を前提とするものであり、しかもそれぞれの個人が自分に独自の意見を、他者と異なる意見をもつユニークな存在であることを明らかにするのである。

この「現われ」の空間は、公的な領域において人々の注目を集め、スポットライトを浴びるという「明るさ」のうちで初めて可能になる。「この明るさは公的な領域だけに存在する」のである。閉ざされた部屋での密議ではなく、人々の集まりにおいて発言することで、あなたはこの明るさのもとに立つ。そして発言とそれへの反論とさらにその反論への反論を通じて、あなたはそこに出席する人々の間に一つの関係の網の目を作りだす。この関係の網の目は、「わたしたちが共通して目に見ている物の世界と同じリアリティをもっている」のである。

あなたは「現われの空間」としての集会において発言することで、このようなさまざまなことを実現するのであり、そこにはつねに公的な領域が生まれるのである。そしてこの公的な領域は、たんに社会における市民的な活動の分野だけではなく、政治の核心的な領域でも実現されるものである。議会における発言がそのような公的な意味をもつのは明らかであるが、アレントはこうした公的な領域が政治的な分野で重要な役割をはたした実例として、一九五六年のハンガリー革命を挙げている。この革命では、市民の間で自然発生的に評議会が形成され、その評議会が地域ごとにまとまった上位の評議会を形成し、それが全国的な評議会の形成にいたり、革命の権力を(エ)ショウアクしたのである。

一九三〇年代のドイツで(オ)失われていたのは、まさにこのような公的な領域だった。人々が大衆としてではなく、市民として発言するための場が失われていたのである。ハンガリー革命のように、こうした公的な領域が成立していたならば、全体主義によって大衆が組織されることはなかっただろう。アレントが古代ギリシアのポリスを例にあげてこうした公的な領域と活動の意味を示したことの背景には、**C**そうした現代的な差し迫った動機が控えていたのである。そのことは『全体主義の起原』(注)において、大衆におけるこうした公的な領域の欠如が、重要な問題として指摘されていたことからも確実であろう。

（中山元（なかやまもとげん）『アレント入門』による）

河合塾